対話の文末の「よびかけことば」

—「ナモシ」類その他について—

藤　原　与　一

私どもの対話では、一まとまりの言表を結ぼうとする時——つまり文末で——、よく、「ネ」とか「ナ」とか言ってしめくくる。相手に対して、聞こえの徹底をはかろうとして、このような、特別のよびかけをする。「そうですネ。」などと言うと、この「ネ」のところに、この一全体の文表現の、よびかけ性・訴え性が明らかである。

この種の「よびかけことば」、しめくくりことばには、さまざまのもののあることが、どなたにも気づかれていよう。「ナモシ」などというのもその一つである。「よびかけことば」は、簡単なものから、複雑なものまで、いろいろある。その用法はまた、それぞれに微妙である。総じて、相手をどのようにか待遇しようとする心意の表現、けっきょくは敬卑の表現になることは、多く言うまでもなかろう。

この種の小詞の使用は、国語の表現法として、特に注意すべきものである。文の形式上の「接続関係」からいちおうはなれて、最後に、文終止点において、ひとり自在にそのはたらきを示すのが、この種の小詞である。（これを私は文末助詞とよんできた。「助詞」の称呼は、通例にしたがったまでである。）対話表現の実際を見るのに、これの役わりは、けっして単純でない。文末詞は、文末にあって、一文の表現効果を、収約的に表示するのである。この種のものは、日本語文法（(表現法)）上の一特質をなすものと見ることができる。

本稿では、日本語の現代口語に見わたされる、文末よびかけことばの大きな体系的存在のうちから、「ナモシ」類その他として一まとめにし得るもの一派をとりあげて、その分布とはたらきとを見よう。

この報告は、昭和二十一年に、国語学会講演会で発表した、「対話の文末『ナモシ』の類について」につづくものである。現代地方語の研究は、今なお、その討究が十分でない。「ナモシ」類その他の分布も、今は今として、これだけのことが言えるということなのであって、今後精査をかさねれば、まだ、どこに何が見つかるかもしれないことである。今はただ、第二次の概報として、以下の発表をするのにとどまる。

一

「ナモシ」などと言われると、人はたいてい、変なことばだとか、古めかしい言ひかただとか思うであろう。今や、「ナモシ」ことばは、私どもの身辺からは遠のいているようである。だが、もう一時代二時代前には、じつは、「ナモシ」の類のことばづかいは、ほぼ全国東西にわたって、そうとうによくおこなわれたものであったらしい。今日の、「ナモシ」類その他の、全国内に分布するありさまを大観するのに、これはまさに、前代の共通語法であったことが想像される。

そういえば、「申す」ということばは、たしかに、全国によくおこなわれたものにちがいない。「モシ。」や「モシモシ。」のよびかけは、今もさかんに、全国各地でおこなわれている。私どもが「モシ。」と言う時の、あの、すこし妙にあらたまったような気分を思いおこしてみるとおもしろい。あれは、「申す」ということばの表現味のなごりであろう。

口ことばでは、「モシ。」と短呼してよびかけるのが全国共通の習慣であるが、俚謡の文句などでは、音律との関係もあってか、「モーシ云々」と言ったりしている。九州方言のうちでは、豊後などでも、電話をかける時に、「モーシモ。」とよびかけたりしている。二度目の「モシ」を「モ」だけにとどめているのである。これなどは、「申し」の方言形と、まず、してよかろうか。店に買い物にはいって「モーシ。」「モーシ(ス)ー。」とよびかけるのは東北の習慣である。亭主を呼んで「モーシ。」などと長呼する風は、民間の雅言として、方々に存在したであろう。

「申す」ということばは助動詞にもなった。「ござり申す」などの用法はそれである。その助動詞としての「申す」が今日よく生きているのは、九州南部の薩隅方言においてである。

○ゴヤッケサー　ナイヤゲモス。

まことに、御厄介さまになります。

○アイガト　モシャゲモシタ。

まことにどうも、ありがとうございました。

などの例を見られたい。この地方では、「マス」という助動詞はなくて、よそが「マス」をつかうところは、すべて、「モス」をつかう。さてその「モス」（申す）が、

○アユ　ミデ　ミヤイモーシ。

あれを見ておみなさいな。

〔薩摩例〕のように、「モーシ」という文末形になると、「もし」との、よびかけ性が、しだいに出てきはせぬか。もっとも、上の文アクセントでは、「ヤイ」が高くて、「モーシ」のところで抑揚は落ちている。薩摩につながる肥後南部の、

○ゴメンクダンモーシ。

御免下さいな。

○ゴメンクダハンモーシ。

御免下さいましな。

のような例になると、「モーシ」は「モー」と高く発音されていて、「もーし」とよびかけるような気味がかなり出てくる。

しかし、ことばつづきから言うと、上のものも、依然として助動詞の形態で、文末助詞的なもの——遊離孤立の成分——ではない。

○さよならモシ。

のようになると、この一いきに言われる表現の、文末の「モシ」は、もはや文末助詞化している。

「モシ。」と第一文でよびかけて、次に用件を言うことばづかいでは、第一文の「モシ。」と、次の第二文とが、密接に関連している。これと同じことは、「モシ。」が第二文となった場合にもある。この後者の場合、「わかりましたか。モシ。」というようなのが、一いきに発音されることがある。そうして、音声表現の抑揚も、第一文と第二文との境で曲節をおかないで、「モシ。」の声づかいが、前文の抑揚の流れに自然に包摂されることがある。こうなると、「モシ」が第一文の文末成分と化する。このような発言、「モシ」のつかいかたが、土地で、さまざまの会話の場合に習慣化すると、ついには文末助詞「モシ」ができあがる。

単独よびかけ文「モシ。」を常用する所なら、この「モシ」文末助詞をおこし得たはずとも思われるのであるが、——したがって、「モシ」文末助詞は全国の方々におこっていてよさそうに思われるが、当今の実情からすると、方言的な用法とみとめられる「モシ」文末助詞は、そんなに方々には見当たらない。「ナモシ」類の存在で注目される尾張から一例を引けば、つぎのようなのがある。

○体のゑゝ泥棒だがもし。　（「地方語読本」）

＜永田吉太郎氏「方言資料抄　助詞編」による＞

「ナモシ」類の内とも見られる「ノモシ」の類の、「ノモ」「ノシ」をよく存する筑後から一例を引くと、

○シェンシェ　モーシ。

先生もし。

のようなのがある。

○ソヤハカイニ　モーシ。

それですからね。

は、大阪府南河内郡下の例である。

「モシ」が「ムシ」となって、文末助詞としての安定を見せている例は、関東西北部・信州北部に見いだすことができる。大久保忠国氏の「埼玉方言の語法」（ニュースクール 7）によれば、

○ソーダ　ムシ。

というようなのがある。

「もし」が、一文の文末部として、習慣的なものになった時、その機能性からして、語形の転化もおこしやすかったであろう。語形の転化とは言うが、つまり、文末助詞らしく発音するので、音相が変化するのである。北信では、「ミシ」という形もおこっている。青木千代吉氏の「信州方言読本語法篇」には、

○そーだってことみし（そうだってことさ）

のような例が見えている。北奥下北半島でも「ミスィ」が聞かれた。

—'

「モシ」の文末助詞としての定着形式の、特異なものに、「モシ」の「シ」を略した「モ」がある。これは主として尾張・美濃の方面に見いだされる。「いりゃあすきゃあも」（入らっしゃいますか。）——〔岐阜県方言集成〕——など、例はよく知られていよう。「モ」

は、独自の安定形式として、よくおこなわれている。

この「モ」が、とびはなれて一つ、南紀の一隅北山村にあり、村内英一氏によれば、

○ドウゾ　アガッテ　チョーダイモ。

どうぞ上って下さいね。

などとあって、親愛の意をあらわすという。（同氏「文末助詞の考察」和歌山大学学芸学部紀要《人文科学III》）福島県下にも「モ」がある。

また、筑後の旧柳河藩地方内外に、

○エー。ソー　タン　モ。

ええ、そうですよ。

○スズシュ　ナカ　バン　モ。

いっこうにすずしくないですよ。

のような言いかたがさかんなのは注目される。これは、東の濃美地方の「モ」と相対する勢である。かれは、「ナモシ」の略形「ナモ」、「エモシ」の略形「エモ」とともにおこなわれ、これは、「ノモシ」の略形「ノモ」とともにおこなわれる。

「モシ」にはていねいな親愛感があるが、「モ」となったものには、概して、そのいくらかくだけたものがみとめられよう。

×　×　×　×　×　×

柳田国男先生の、「毎日の言葉」（昭和二十一年）にのせられたお説に、

大阪の女の人たちのユクシ・イヤヤシといふ終りのシなども、或は亦東北のアノス・行クスの「ス」と共に、古くからあった物申すの最後の残形であるのかも知れません。（三九頁）

というのがある。これにしたがうと、大阪方言の、

○ウチ　シランノヤ　シー。

わたし、知らないのよお。

などの「シー」は、「モシ」の「シ」かもしれないということになる。だとすれば、ここにも、「モシ」文末助詞のいま一つの特異な安定形式を見いだすことができる。

上の解釈は正しいかどうか。柳田先生が、わりにはっきりと言っていらっしゃる東北の「ス」については、後に、北条忠雄氏のお説、

実に東北方言の対者尊敬に用ゐられるスはこの強意指定のシに外ならぬものである。

藤原註　氏の「強意指定のシ」とは、文語の「……かし。」の「し」がある。（昭和二十六年「東北方言に於ける対者尊敬『ス』の本質」国語学第六輯）私は旧来、柳田先生のお説に追隨してきた。しかし、大阪方言の「シ」（その亜流とも言える神戸や姫路の「シ」でも）については、柳田先生も別にふれていられるように（「国語の将来」二三四頁）、「雨も降るし疲れても居るから寝よう」といったような言いかたの「シ」のさしひびきも、考えられるかと思う。それにしても、現在の用法そのものは、多く「モシ」的な文末訴えになっている。もはやこのことばづかいは衰退しつつあるらしいが、ともかく、ものは、おおよそ、文末のよびかけことばとして、性格を成しているようなのである。その上げ調子に引っぱって発音するところには、女性語らしい面目がよく出、余情にも富む。

大阪府下南河内郡での調査によれば、この方では、「ナモシ」という文末助詞を、現に老人がよくつかう。「モーシ」というのも、文末助詞としてよくつかわれている。四国や紀州に「ナモシ」系のもの、「ノモシ」系のものがよくおこなわれている現状とも考えあわせるのに、大阪府下に「ナモシ」があってもふしぎではなく、したがって、大阪市中心に、「モシ」系の「シ」文末助詞があったとし

ても、理は通ずるように思われる。

が、今はなお、この「シ」を、「モシ」系と断定することなく「モシ！」、と相手の気を引く言いかたに、通ずると見れば見られるもの——そういう意味作用のもの，としておこう。このように理解するならば、まさに、東北の「ス」（シ）も、大阪方面のといっしょに合わせて考えることができる。東北の「ス」（シ）は、そう言いかけることによって、相手へのよびかけ・訴えの気分を、つよく出しているのである。こういう「シ」（ス）は、近畿以東の諸地域に、広く見いだされるようである。

京都府下や紀州で聞かれる、「これ　見ヨシ。」、「マタ　キテ　オクレ　ヨシ。」〔北紀〕などの「シ」も、今問題としている「シ」とされよう。近江・北陸路に、この「シ」の分布がいちじるしく、愛宕八郎康隆君の調査によれば、能登例で、

○イッタ　カイ　シー。

行ったかね。

のようなのがある。——この「シ」を、「モシ」的なよびかけの「シ」、すくなくとも、そういう気分の文末助詞と見ることはゆるされよう。

信州に例があり、甲斐に例がある。

○タベロッ　シー。

たべなさい。

は甲斐西南部の例である。甲斐の人は、「こたつに　アタレ　シー。」は「あたりなさい。」であると言う。

○ドー　オシタイ　シ。

どうなさいましたの？

は三河北奥の一例である。人はこれを、「ずっとていねい」な表現であると言っている。女のことばとは限らないとのことである。

関東の少例をへて、いよいよ東北の「ス」（シ）地域が開ける。越後北部はそれにつらなるものであり、宮城県下は、「ス」がやや劣勢のようである。福島県下から見よう。

○ドゴイ　イガル　シ。

どこへいらっしゃいます？

は会津弁で、女性の発言である。“ヨとかシとかは、敬語を含んでいる。”という。“シは謙遜のことば。ネよりもちょっとちがう。鄭重な敬意をあらわすようである。おちついたことばだ。”などともあった。また、“シは、こちらと相手の人とを結びつけるはたらきをする。接着剤だ。Let us のような、さそう気もちがある。”などともあった。「アノ　ナー。」は目下に、「アノ　ナシ。」は目上に言うという。「ナシ」の「シ」の効果がみとめられよう。「ナシ」のこのような用法からは、いっそう、「シ」に「モシ」を想像しやすくはないか。

山形県下の例にうつると、

○コージツーモンデ　ツゲダ　モンダ　シ。

（この、茄子の丸漬けは、）麹というもので漬けたものですわ。これはね。

○コンバンワ　シ。

今晩は！

○ソーユー　トキニワ、カワイソーナ　モノ　ヨー　シ。

そういう時には、かわいそうなものよね。

は米沢地方のことばである。「シ」のよびかけが、明らかであろう。「……モンダシ。」は、一老女が筆者に、「……ものだ。」と、説明してくれたものであった。上の、最後の例の、「ヨー」に「シ」がつづいているのは注目にあたいする。当地方には別に、「ナーシ」「ナシ」の、それぞれ、一体性の明らかなものがある。この「ナー

シ」などから「ヨー　シ」をへて「コンバンワ　シ。」などにきてみると、「シ」とだけあるものにも、やはり「モシ」的なものが感じられよう。

羽前の「村山方言会話集」（斎藤義七郎氏）によれば、

○コンニッツァッス。キョーナスエラネケベガッスー。

「今日は。今日は梨はいりませんでしたらうか」

のような例がある。よびかけことば、「ス」が、明らかである。（さきには「シ」、ここには「ス」と表記されてあるが、ともに、「シ」と「ス」との中間の発音になるものである。）

○ンメサンガダ　ドゴサ　イグ　スィ。

あなたがたはどこへお行きですか。

これは羽後の例である。こうして最後に「スィ」をつけると、もの言いが上品になるという。「シ」（ス）と言ったので、多少とも品がましい、あるいは、やわらかいおだやかな表現になるのは、東北一般のことであろう。羽前につづく越後北部でも、すこし目上のものに、

○コイシ。オマエサマ。

あのね。おまえさん。

と言い、「あのね。」よりは「コイシ。」の方がよいという。「コイシ。」は「コイコイ。」（おいおい。）に対することばである。土地人は、「コイシ。」と言うと、よびかけに、したしみが出るとも言っている。どこの場合にも、大体、「シ」（ス）が、何の待遇効果もおこさないことは、有り得ないであろう。おこすとして、それは、わるくない感情を表現するものであることは、「モシ」のよびかけ気分に通ずることとして注目される。

羽後から陸中の例にうつれば、

○マンダ　イガネァ　スー。

私はまだ行きません。

○マンダ　クワネァ　ス。

まだたべません。

のような「ス」は、相手によびかけるものであることが明らかであろう。人は、“何にでもこの「ス」はつく。「ス」に敬意はない。しかし、したしみがある。”などと言っている。相手へのしたしみとは、つまり、したしんで相手を待遇しようとする、敬卑上の心理である。私どもは、そういう「したしみ」を、自由に、敬意とも言うことができる。当地方の方言絵葉書（「盛岡方言」第一輯）には、

○岩手山（おやま）はいつ見ても秀麗（ええ）なス。

○左様（ん）だなっス。

○真実（ほんと）にス。

のような書きあらわしかたがしてある。「なス」の場合も、「ス」を分別して、「ス」ばかりをカタカナがきにしているところがおもしろい。「ス」は、そのように、特別なものとして意識されているのだと言えようか。宿屋で女中さんが言ったということば、

○お客さんス。湯サ　オヒァレンセ。

などは、「もし（いい）お客さん。湯におはいりなさいませ。」というようなところであろう。

つぎは北奥のはて、青森県下の「シ」（ス）である。東の「南部」では、

○キョーア　エヤ　スィ。

今日はいいですよ。いらないわ。

と魚屋にことわっている。

○ハヤク　ママ　クベ　スィー。

これは、「早くごはんをたべましょうよ。」である。西の津軽でも、

○アッパ　ハヤク　ママ　クベ　スィー。

お母さん、早くごはんをたべましょうよ。

のように言っている。津軽半島の、

○コレ　オメ　ヤッタンダベ　スィー。

これはおまえがやったんだろうね。

については、“多少上品だ。「スィー」のつかないのよりも。”との説明があった。

以上、東北の「シ」（ス）は、「ほんとにス。」のように、自由なはたらきのものである。遊離独立の成分とも見られることが多い。この線をつよく押すと、これの起源は、「モシ。」というような、一つのまとまった言表ではなかったかと考えられるようになる。加えて言えば、後に述べるとおり、東北地方にも、「ナモシ」「ナムシ」「ナモ」「ナム」などが現にあり、昔は今以上に方々に、これらがあったらしい。「モーシー。」の単独のよびかけのあることはさきに述べた。文末助詞化した「モシ」や「ムシ」も北奥にあり、「モシ」の「モ」は福島県下にある。このような事情から察するのに、東北について、「モシ」の変転としての「シ」を考えること、「シ」（ス）は「モシ」的なものではなかったかと推想することは、ゆるされることかと思うのである。

ともあれ、よびかけことばとしての「シ」（ス）は、このように近畿から東北にわたる広域で、種々に見いだされる。その待遇表現上の表現性は、まず、みな相等しいもの、同一方向のものと見ることができる。

二

文末助詞（文末小詞）「モシ」「モ」「シ」などに対して、一方の大分野に、「ナモシ」「ノモシ」「エモシ」などの世界がある。

——「ナモシ」「ノモシ」などというのは、「モシ」だけの形にはと

どめないで、さらに、頭に、「ナ」や「ノ」などの、感声（感動詞）をかぶせたものである。この方式のものが、さまざまな文末助詞形を分生せしめており、ここに、文末助詞相の特異な広がりが見られる。

「モシ」ということばは、「ナ」や「ノ」などと契合することによって、文末詞としての、新しい安定形式についたのである。安定形式であるとともに、これらは、一種の強調表現法になるものであった。

その点では、「ナモシ」ではなくて、「モシナ」というような重なりがあってもよさそうである。しかし、実情は、たいてい、「ナー」「ノ」などの単純感声を先として、その下に「モシ」をつけている。こうしたのが、日本語表現法上の文末助詞として、いっそう、安定がよかったのであろう。その自然のおちつきにしたがって、そこに、自在な転化形式をいろいろに見せている。以下、「ナモシ」系、「ノモシ」系というように、順を追って、項を分けて、記述してみよう。

はじめに、「ナモシ」系のものをとりあげる。

ナモシ

「さむいナモシ。」などという、文末助詞「ナモシ」は、まず四国の伊予においてよくおこなわれている。伊予も中部がこれをよくつかっている。四国では、伊予についで、阿波がこれをかなりおこない、たとえばその南部では、

○ウチノ　コドモガ　オーケ　オセワン　ナッテ　ナモシー。

うちの子どもがたいそうおせわさまになりましてねえ。

と言う。「ナモシ」の言いきりが、「ナモシー」と、長呼になるのは、話しのいきおいの自然によることであろう。四国と相並んでは、中部地方の美濃・愛知・南信に、「ナモシ」がよくおこなわれている。

大阪府下の分布（例「逃げきってしもたらええのにナモシ。」）をはさんで、こう東西にある二大分布が、「ナモシ」分布の現勢の、おもなものとされよう。

東北地方に、多少これがあるらしい。岩手県北で、

○ソーダナモシ（ス）。

「さうですね」

などと言う。（小林好日氏「方言語彙学的研究」）「岩手県釜石町方言誌」の編著者八重樫真氏が永田吉太郎氏に寄せられた私信（「方言資料抄助詞編　四二三頁）によれば、

九十で没した祖母など「ナモシ」「ナムシ」と云ふのを以てすれば漱石の「坊ちやん」などに見える「ナモシ」なあ申し と本来同一のものかとも思はれますが

とある。とすれば、一時代前までは、もっと方々に「ナモシ」がおこなわれていたか。もうすこし古い時のことなら、大丑源右衛門序するところの「仙台方言」に、

ナムシ。ナモシ。ネナイシヤ。ネナイシ。ナァ。

があげられて、

他邦にてのノと云所に用ゆ。人の物語を聞て。サテナムシ。サテナモシ。サテナイシヤ。サテナイシ。サテナァと云類。又人に物語するに。コフデナムシ。アヽデナモシ。など云類なり。

とある。

東北に対して、西海九州に、いくらかの分布がある。大浦政臣氏の「対馬北端方言集（二）」（方言二の三）によれば、

ナァモシ、ナァムシ　　同意を求める時の詞

ノウヤも同じ

とある。山口麻太郎氏の「壱岐島方言集」にも、「なーモシ　なモシ」が見えている。豊永徳君の報告にもこれがある。豊永君はまた

肥前西北部でも「ナモシ」を見いだしたようである。

「ナモシ」は、そこここにではあるが、国の東西にわたって分布している。これがもし、昔の対話のよびかけの、一種の雅言であったのなら、以前はもっと、そこここに、おこなわれていたであろう。今の分布には、遺影のおもむきがある。ただ中国地方には、それらしいものが全然見えないのは、ふしぎである。「申す」ことばの今もよく生きている九州南部にも、「ナモシ」は全然ないのが注目される。それらはそれらとして、現におこなわれている所では、このことばは、一般に、古風な品位を持った、よいことばとされている。

ナムシ

「ナモシ」の最初の転訛形としては、「ナムシ」があげられる。対馬北部南部・美濃・南信・岩手県下などにこれが見いだされる。

○ウラノナムシ。ナバタノナムシ。ナノハニナムシ。ナムシガナムシ。

裏のナムシ。菜畑のナムシ。菜の葉にナムシ。菜虫がナムシ。

は、南信州上伊那での一つの言い草である。

ナオシ、

これも、「ナモシ」の早いころの転訛形と見られよう。阿波の南隅にこれがある。

○ソーデス　ナオシ。

そうですねえ。

ナーシ(ス)・ナンシ(ス)・ナッシ(ス)・ナシ(ス)

「ナーシ」は「ナモシ」の一転形と見られようか。これは伊予の南部にいちじるしく、ここでは「ナシ」もおこなわれている。

○アリヤイデ　ナーシ。

ありやわせでねえ。

○ソー　デス　ナシ。

そうですね。

など、その用語気分は伊予中部・南部の「ナモシ」の場合に似かよい、したしみぶかい敬意を表すことが多い。南予・土佐西南部には、「ナンシ」もある。西の方では、九州肥前の島原半島に、「ナーシ」と「ナシ」とがいちじるしい。

東に行くと、近畿では、近江の「ナーシ」「ナシ」が注目され、つづいて、美濃・南信の地の「ナーシ」が注目される。木曽には「ナシ」もあり、美濃・愛知では、「ナンシ」がさかんである。信州の東部にも「ナンシ」がある。

つぎは東北地方で、南奥岩代に「ナーシ（ス）」があり、福島県下に広く「ナシ（ス）」が見いだされる。この「ナシ（ス）」は、北の山形・宮城二県の南部に、つづいて見いだされる。山形県南部には「ナーシ（ス）」もある。「ナシ（ス）」はまた、岩手県から青森県東部に見いだされる。

○アノ　ナスー。

あのね。

これは盛岡の南方の例である。岩手・青森県東南部には「ナンシ（ス）」もおこなわれ、これは秋田県下にも、

○マンヅマンヅ　イカタ　ナンス。

まあまあよかったですね。

などと、さかんである。山形県南部・福島県会津にもこれがみとめられる。「ナッシ（ス）」とつまった形は、福島県会津・山形県下・岩手県下にみとめられる。

上述の、「ナーシ」以下の諸形の、ものとしての緊密な関係は明らかであろう。そのたがいに関連して分布するさまは、よく、それらの形式の類同をものがたっている。

このおのおのは、「ナーシ」「ナンシ」をはじめにおいて考えれば、みな、「ナモシ」と関係の深いものであることが知られよう。したがって、これらはすべて、一系の「ナモシ」系のものと見ることができる。

しかし、東北地方の「ンダ　ナッス。」（そうですね。）などの「ナッス」と発音されているものや、「……なス。」と表現されているものを見ていると、これらは、「ナ」に「シ」（ス）が附いたのではないかと思われる。「ナーシ（ス）」や「ナンシ（ス）」についても、そういうことが考えられる。それにしても、東北の「シ」（ス）についての、さきのような解釈がゆるされるとすれば、今の「ナッシ（ス）」や「ナシ（ス）」を、さらには「ナンシ（ス）」や「ナーシ（ス）」を、「ナモシ」系の列中に配置することは、さしつかえないと思う。「ナシ」を一体のものとするうけとりかたもしている。盛岡市の南方の人は、

「ソーダ　ナ。」よりも「……ナス。」の方がつよくて、かつ、したしみを含む。つよさよりもしたしみの方が大切な要素である。

と言っていた。米沢近在の一老人は、

「ナシ」トユーコトバワ　タイヘンニ　リッパニ　ツカッテルワケダ　スィ。

と言っていた。

一般に「ナーシ」以下がみな「ナモシ」系のものであるとしても、形の変差とともに、待遇表現価もちがうのは当然である。「ナシ」には「ナシ」にふさわしく、待遇気分の簡略なものがあろう。もっとも、伊予の「ナシ」と東北の「ナシ」（ス）とは、すぐに同一視することはできまい。前者が、きわめて単純な「ナシ」一体のものであるのに対して、後者には、上述のような、「ナ、ス」の累加のあとも

感じられるからである。

ナモ・ナム・ナオ

「ナモシ」→「ナシ」の系列に対して、傍流の地位にあるものに、「ナモ」→「ナオ」の系列がある。「ナモシ」の「シ」を略したものである。

岐阜・尾張・三河奥・南信の一部では、「ナモ」をよく言う。近ごろ、尾張の芥子川津治氏は、この方面の「ナモ」の分布を精査され、昭和三十年十一月、国語学会で、「『ナモ』の分布と成立について」を発表された。ここに、あわせて、私がかつて聞書きした、三河奥、北設楽郡稲武町の例をあげれば、

○ソーダ　ナモ。

そうですね。

というのがある。これについて、“女の子が普通によく使う。女は大人も。男の大人はあまり云わぬ。”とあった。

越中の西南部にも「ナモ」があるらしい。私はかつて、越中南部の、飛騨境の細入村で、

○オカズワ　ナモ。ワズカナ　モンデスカラ。

おかずはねえ。わずかなものですから。

というのを、六十才くらいの男子から聞いた。さらにこの人にたしかめたのに、“今の人間は言わぬが、ムカシノニンゲンワ、「ナモ」トユーコトヲ、チョイチョイト　ツカイマスワイ。」——「ドーシトルンヂャ　ナモ。」——”とあった。

分布を東に求めれば、福島県会津の地に「ナモ」があり、西を見れば、南紀州の一隅にこれがあるらしく、阿波の南部に「ナモ」がある。

九州に行くと、壱岐や肥前北部内に「ナモ」があり、さらに、注目すべきことに、長崎市を東に出はなれた古賀村に、「ナモ」がさ

かんである。

○サムカ　ナモー。

寒いわねえ。

○アツカデス　ナモー。

暑いですねえ。

などと言う。

「ナムシ」の「シ」略「ナム」は、福島県岩代・南信に見いだされ、飯田市では、

○キョーワ　サブイ　ナム。

今日は寒いね。

と言う。「ナム」は「ナン」になりやすいであろう。もっとも、「ナン」とあるものには、「ナンシ」の「シ」略もあることと思われる。

阿波の南隅には「ナオ」がある。

○目上の人に言うことばになるとナオ。

これは土地の人が私にかたってくれたことばである。「ナオ」は同地域の「ナオシ」の「シ」略とも、また、同地域の「ナモ」からの変転ともうけとられる。「ナオ」も、ていねいなことばとされていて、人は、“目上の人に対してでないとつかわれない。”とも言った。

「ナモ」「ナム」「ナオ」も、品位の低いことばではないことがわかる。「ナシ」のような形と、この下略形とは、にわかにはくらべられないが、「ナモ」などの言い切りの形で、特定の表現効果をかもしたことは、想像にかたくない。むかし、「どうどうしてタモレ。」の「レ」略、「……タモ。」というのがあった。「タモ」と「ナモ」（後に言う「ノモ」も）とは結果が同巧である。今日の分布で、「ナモ」と「ナシ」とは共存していない。「ナモ」類は、ものやわらかな情感のもとで創作され、女性的な文末表現に役だてられるようになったものと思われる。

三

「ナモシ」系についで、「ノモシ」系がとりあげられる。ナ行音感声「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」に応じて、そのおのおのと「モシ」（あるいは「モシ」的なもの）との熟合がある。

ノモシ　ノモ

「ノモシ」はおもに伊予の東部に見いだされ、内海の属島でもこれが見いだされる。

○ヨー　フリマス　ノモシ。

よく降りますねえ。

は伊予東部の例である。

「ノモシ」の略形「ノモ」は、筑後の旧柳河藩地方に見いだされる。（拙稿「筑後柳河ことばの『メス』と『ノモ』」近畿方言 15）

○セイトワ　シットル　ノモ。

生徒は知ってるねえ。

は、八女郡白木村の一例である。尾張の西北にも、「ノモ」があるらしい。

三河の渥美半島で、

○ソーダ　ノモシ。

のように、「ノモシ」と言っているのは、注目にあたいする。ただし、“だんだんなくなっていくことば。おばあさんたちが使う。”という。

ノーシ(ス)・ノンシ(ス)・ノイシ・ノッシ(ス)・ノシ(ス)

「ノモシ」の伊予東部には、「ノーシ」もある。島嶼でも、子どもどうしが、「アノ　ノーシー。」などとよびかけてもいる。が、「ノーシ」のもっともさかんなのは、土佐一国であろう。

○ドナタモ　オイデマセザッツロー　ノーシ。

どなたもおいでになりませんでしたでしょうねえ。

は、土佐西部幡多郡下の例である。上品なことばとしての「ノーシ」の持ち味は、上の例で、「ノーシ」が「ドナタ」や「オイデマセ」とつりあっているところに、よくうかがわれる。土佐には「ノンシ」もあり、「ノシ」もいくらかある。幡多郡南方の小筑紫村の場合だと、「ノーシ」と「ノンシ」とが敬意度を同じくして、およそ三十才くらい以上の人が「ノンシ」を用い、「ノーシ」は若い人が用いるという。

紀州に行くと、全般に「ノシ」がさかんであり、北紀の日高郡川上村では、一老女が私に、私のことばを批評して、

○チョット　ミノノ　コトバニ　ニテル　ノシ。

ちょっと美濃のことばに似ていますね。

とかたった。「ノシ」は、鄭重なことばづかいになる。格別の強調や感動のそうこともある。

○ソー　カ　ノシ。

は、新宮の、日上へのことばである。「ノシ」は、三重県分紀州にもおよぶ。

○エライスマナンダ　ノシー。

ほんとにすまなかったわねえ。

は木ノ本の例である。その「ノシ」のはてるあたりに、「ノイシ」がある。三重県尾鷲町近くの九木部落で、

○アン　ノイシ。

あのねえ。

などと言う。紀州にはまた、南紀中心に、「ノンシ」が見いだされる。（串本では、これが上品語としておこなわれていた。）「ノーシ」もいくらか見いだされる。

以上の四国と紀州についで、東を見れば、美濃のうちに、「ノーシ」「ノンシ」「ノシ」があり、三河のうちにも、「ノーシ」「ノンシ」

「ノシ」がある。三河奥では、“今はほとんどないけれども、まれに「ハヤイ　ノーシ。」などと言う。”とのことであった。

静岡県下に「ノーシン」「ノンシ」がある由、明治四十三年の「静岡県方言辞典」に見えている。房総半島の安房にも、「ノンシ」があるらしい。

北陸では、越後に「ノシ（ス）」がある。（ソーダ　ノシ。）奥信濃にもこれがあるという。越後中部方面では、「ノンシ」もさかんである。

越後につづいては、山形県内に、「ノシ（ス）」が見いだされる。山形県南部には、「ノンシ（ス）」もある。

岩手県北にも、「ノーシ（ス）」「ノッシ（ス）」が見いだされる。たとえば、

○ソー　サネァ　ノッス（ノース）。

そんなにしてはいけないことよ。

などと言う。青森県東部にも「ノシ（ス）」がある。

西の九州では、また、島原半島に、「ノーシ」「ノンシ」「ノシ」があって、「ノー」に対して「ノーシ」は対日上用とされており、「ノシ」は、筑後にも見いだされる。

「ノーシ」以降「ノシ」までの、すべての形をまとめて観察すれば、これらもやはり、国の東西に分布している。ただ、「ノモシ」「ノモ」とはっきり言うものは、分布が西にかたよる。

「ノーシ」が「ノモシ」に近いことは、その両方を言う私の郷里で、私自身、実感している。郷里では、ていねいには、「マー　エーコト　ヨ　ノモシ。」（まあいいことですわねえ。）のように、「ノモシ」を言い、これは、おもに古老の婦人がおりおり用いる程度である。その次位のものとして、——いくらかやわらげた言いかた、ていねいさのすこしよわい言いかたとして、「ノーシ」がある。

○アノ　ヤマワ、エー　ヤマン　ナッタ　ノーシ。

あの山は、いい山になりましたね。〔山林の成育に言う〕

このような「ノーシ」は、男性もつかい、中年のものもつかう。郷里方言では、たしかに、「ノモシ」が「ノーシ」にくずれたと見られるのである。さてこの「ノーシ」は、発音しだいで、「ノンシ」とも「ノイシ」ともなり得るであろう。伊予東部には、そんなうつりゆきがあるらしい。

東北地方の「ノッシ(ス)」「ノシ(ス)」などの形については、「ナッシ(ス)」「ナシ(ス)」などについて述べたところにゆずって、今は言わない。これらをも含めて、以上全部の形を、「ノモシ」系とする。

四

「ノモシ」に対しては、「ネモシ」もできていてよさそうである。しかし、実際には、「ネモシ」というのは見あたらず、「ニモシ」というのもない。(「ヌモシ」もない。) 共通語的な「ねえもし。」のよびかけは別である。それはあっても、「こまったネモシ。」などのような、文末助詞化した、一体の小詞「ネモシ」はないようなのである。

しかし、「ナモシ」系での「ナーシ」以下の形、「ノモシ」系での「ノーシ」以下の形に該当するものは、いくらかできている。「ネーシ(ス)」「ネンシ(ス)」「ネシ(ス)」などがそれである。

この類のものは、「ナモシ」系・「ノモシ」系のさかんな四国・近畿内・岐阜県愛知県地方（南信を含む）にはほとんど見いだされなくて、おもに東北地方に見いだされる。東北では、「ネ」にも「シ(ス)」が自由について、このような結果を来たしたのであろうか。

青森県下では、「ネシ(ス)」「ネーシ(ス)」がさかんであり、「

ソンダ　ネスィ。」（そうですね。）などのように言う。秋田県の中部や半島方面にも「ネシ(ス)」があり、「ネーシ(ス)」もある。

岩手県海岸地方から宮城県にかけても、「ネンシ(ス)」「ネシ(ス)」などが見いだされ、仙台では「ネシ(ス)」はいちじるしく、かつ、仙台方面や仙北地方では、「ネーシ(ス)」を言う。

○スバレッ　コダ　ネーシー。

ひどく寒いことですねえ。

は仙北の一例である。

山形県下では、山形地方に「ネシ(ス)」があり、つづいて、越後の北部中部に「ネシ(ス)」がいちじるしい。「ネシネシて言わんことネシ。」は越後の言い草である。新発田では、「ネスィ」を、“一つには敬い、一つには親しむことば。”などと言っている。

福島県下にはこの類のものはないらしい。その南の茨城県下では、「ネシ」があるという。（茨城方言集覧一二四頁、一七七頁）

下って、中部地方の南信の一部に、「ネンシ」があるという。

あとは、西辺にとんで、対馬に「ネーシ」があるというのが奇である。

東北では、「ネシ(ス)」は、目上に対して、また同等のものに対して用いられると言われている。「……～シ。」と言えば、本来、やさしい、やわらかな、したしみぶかい情感が発揮されるわけであろう。わるいことばにはなりようがないものとも言える。

感声「ニー」にちなんでは、「ニシ(ス)」という文末助詞ができており、これは、北奥・南紀（「ニセ」も）・島原半島などで聞かれる。

つぎに、ナ行音感声ではないが、「エ」というのに、「モシ」のついた、「エモシ」がある。尾張・美濃の地方で、

○ソレデ　エモシー。

それでねえ。

のように言う。美濃に、「エムシ」という転化形もある。

「エモシ」よりも、その「シ」略の「エモ」の方がよくおこなわれていよう。これが、尾張・美濃方面で、例の「ナモ」「～モ」とならんでおこなわれている。

○何々と思いましたけどエモ。

は、尾張西部の一例である。

一つはなれたところ、南紀一隅の「エモ」が、「ナモ」とともに、村内英一氏によって報告されているのは、注目にあたいする。（同氏の前記論文参照）

五

以上、対話文末の、特定のよびかけことば、「モシ」→「ナモシ」以下のものについて、現在のおこなわれかたを見てきた。文末助詞の、かぎられたこの方面にも、そうとうに多彩なものがあること、かつ、これらによって、日本語の口頭語の表現は、微妙に支持されていることが明らかであろう。

ここにひとつおもしろいのは、以上の文末助詞が、中国地方には分布していないことである。「ノー」のさかんな中国にも、「ノーシ」はない。しかも、中国路に接する伊予島嶼には、「ノーシ」「ノモシ」がおこなわれている。分布のふしぎは、容易なことでは説明しきれない。九州の状態も、解明に困難である。

まとめてみれば…濃尾地方に四国地方が、「ナモシ」類その他の諸事項を、しげく分布せしめており、近畿の紀州・近江の地域がその両者のつなぎとなっており、西に九州西辺の関連分布が見られ、東に東北方面の「シ(ス)」本位のつよい分布が見られる、ということになろう。この様相が、以前にはもっとどうかであったものの変

容であることは想像できる。この種文末助詞の、他種類の文末助詞とも深く関係した、推移隆替のあとが、今はこうなのであろう。「ナモシ」系、「ノモシ」系、「ネーシ」系の、相互の間の分布の差異も、ゆえ深いことと思われる。

「モシ。」のよびかけ法が今日もよく利用されていることは、あらためて言うまでもない。「モシ」のこのような性能ゆえに、「ナモシ」類その他の文末助詞は、大いにさかえたのである。しかし、これらは、明日の文末助詞としてよく生きるものであるかというと、現状はすでに否と答えている。では、今後は、どういう種類の文末助詞が、一大勢力となって、全国的に、そのよびかけの能力を発揮していくであろうか。

こう考えるにつけても、「ナモシ」類その他の文末助詞が、いかにも特色のある、一群の文末表現要素であったことがわかる。このものは、日本語表現法の、文末法ともいうべきものの特質を考えしめるに十分であろう。（1956. 1 .16.）

Words of Appeal at the End of Sentence in Japanese

—— '*Na-moshi*' and its kind ——

Y. Fujiwara

Colloquial Japanese has a remarkable usage of putting, after a whole of expression, some specific particle, by which the whole expression is bundled. The word-order of an assertive sentence of Japanese is as follows : 1, a subject (a noun or a pronoun), which often remains unexpressed and to which is added one (or more) auxiliary word ; 2, a predicate (a verb, to which may be added one or more auxiliary verbs, or an adjective or an adjectival-verb). Thus the structure of subject-predicate relation is, for a while, completed. Last of all, however, without any relation to the preceding sentence structure, a particle of appeal is added ; for example,

Watashi-wa shirimase-n yo. (= I don't know!)

Notice the last word '*yo*', which is the above said specific particle.

The Japanese language has developed this kind of particles as the important element at the end of colloquial expression, and there has naturally been rise and fall of their usage, some having gone out of usage, while other new forms successively coming into use. The expression of colloquial Japanese is, on every occasion, exquisitely tinged with nuance by these particles. The emotion in variously treating the spoken-to is expressed intensively by these particles.

The present writer chose, as examples of particles of

the sentence-terminaton, the particle '*na-moshi*' and its kind. Japanese has had, since former times, a sentence of appeal, '*moshi*', to which the interjective particle '*na*' or '*no*' was joined, and there have been brought about the particle of sentence-termination '*na-moshi*' and others. '*Moshi*' itself has become a particle of sentence-termination, and its abbreviated forms '*mo*' and '*shi*' do also exist. '*Na-moshi*' and '*no-moshi*', too, have yielded their respective abbreviated forms. I have tried to describe accurately the actual distribution and functions of these forms. I should be happy if readers will, by this article, apprehend one of the most characteristic features of Japanese expession, i. e. the expression with 'sentence-termination'.